

「戦後70年」の 日本と歴史認識

講演要旨

高橋哲哉 先生

(東京大学大学院 総合文化研究科 教授)

2015年11月14日

◎歴史と向き合う

今日は『戦後70年』の日本と歴史認識」ということで、日本社会の問題点を挙げていきます。

私自身の考え方として、日本の過去の植民地主義による侵略は間違っていたと心の底から思っています。

日本人として過去の歴史を直視して、その反省の上に別の日本をつくっていきたくなくとも思っています。日本の中では、日本人がこういうことを言うと、自虐的、反日的、果ては国賊、売国奴などと言われたりしますが、そんなことはありません。私

2015年は、私たちにとって祖国光復・解放70周年、また日本にとっては敗戦70周年であったが、近現代の歴史認識をめぐる軋轢が続いた年でもあった。「靖国史観」に代表されるような歴史修正主義の広がり、歴史を「認識」する以前に事実認定レベルで看過できない言説を多く生み出している。また、近代植民地主義の思想的背景にはレイシズムがあり、その意味で歴史認識問題とヘイトスピーチは地続きで表裏一体の問題と言える。

本会はこの節目の年に右の2つの問題をテーマとして講師を招き、大学・大学院奨学生を対象に講演会を開催した。誌面の都合上、全文を掲載することはできなかったが、読者の皆様に共に考えていただく上で一助となれば幸いである。

は日本を、まともな日本にしたいとずっと思っていましたし、そのためにはどういう歴史認識が相応しいのかを考えてきました。

私は西洋哲学、特に20世紀のフランスやドイツ等の哲学を研究していました。20世紀のヨーロッパという、二度の世界大戦が思い起こされます。特に第二次世界大戦のときは、ナチスドイツが猛威を振るい、ユダヤ人に対する大虐殺が起こりました。ホロコーストやシヨアーといわれる事件で、600万人が殺されています。

この事件は大きな衝撃をヨーロッパの哲学・思想界に与え、戦後も続

く一大問題になりました。ヨーロッパの哲学者、思想家、その他の研究者たちは、「なぜこんなことを起こしてしまったのか」ということを一生懸命考えました。

私は、それと同じことが、戦後の日本で果たしてどれだけ為されてきたのだろうかと考えたのです。日本も第二次世界大戦ではナチスドイツの同盟国として戦争をしました。それは植民地を維持するためでした。戦後、日本はその歴史に果たしてきちんと向き合ってきたのだろうかという自問です。

私が皆さんくらいの年齢のとき、日本にはまだ戦前の考え方が残っていました。時代が進めばよくなるのではないかと考えていました。「政府の行為によつて再び戦争の惨禍が起ることのないやうにすることを決意し」と憲法前文に宣言しています。そして、憲法9条では戦争を放棄し、軍隊を持たないことも謳っています。

しかし、実態はそうではありませんでした。当時も政府の高官や閣僚たちが、「南京大虐殺はなかった」「植民地支配はいいこともやった」